

## 松下国際財団 研究助成

## 研究報告

【氏名】 小川 仁

【所属】(助成決定時)

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻 後期博士課程

【研究題目】

近世日欧交流思想の形成

—慶長遣欧使節通訳兼折衝役 シピオーネ・アマーティの視点から—

【研究の目的】

本研究で取り上げるシピオーネ・アマーティ(Scipione Amati)は、1613年に伊達政宗が送り出した外交使節、慶長遣欧使節に同行したイタリア人である。慶長遣欧使節一行がマドリッドからローマまでに至る半年間、使節の通訳兼折衝役として同行し、その体験記である『日本奥州国記』(*Historia del Regno Voxu*)を1615年に出版した。一方で日本を訪れることはなかったものの日本に関する記述、すなわち『日本簡略記』(*BREVE RISTRETTO Delli tre' stati Naturale', Religioso, e Politico del Giappone*)も執筆している。この著作では主に安土・桃山期における日本の政治体制について論じられており、彼の異文化の政治に対する並々ならぬ関心を窺い知ることができる。このようにアマーティのテキストは、日欧交流史を研究する上で不可欠な史料であるにもかかわらず、これまで研究対象に据えられたことが殆ど無かった。したがって本研究では、経歴不詳とされてきたアマーティの人物像を明らかにしつつ、彼の他の著作、とりわけ政治論文にまで考察対象を広げ、政治思想の文脈から彼の異文化に対する眼差しを考究する。

【研究の内容・方法】

シピオーネ・アマーティは、慶長遣欧使節との邂逅直前にマドリッドのヴィットーリア・コロナナの邸宅においてタキトゥスに関する政治論文を執筆中であった。加えて1609年から1648年にかけてアマーティ執筆のもと出版された数篇の政治論文には、いずれもコロナナ家を称揚する記述が認められる。これらの事実からしてもアマーティがコロナナ家と深い関係にあったことは想像に難くない。そこで申請者は6カ月に渡り、ヴァチカン文書館(L' Archivio Segreto Vaticano)及びコロナナ文書館(L' Archivio Colonna)での文献調査を実施した。前者には105巻のバンドルから成るコロナナ家文書(Fondo Colonna)が収蔵されている。この文書群は未整理故に全く目録化されていないため、1巻目から具に目を通していき、アマーティに関連のある記述を拾いあげていくこととした。一方後者はローマから南西に70km離れたズビアーコ(Subiaco)にあり、聖スコラスティカ修道院(Monastero di S.Scolastica)図書館に併設されている。収蔵されている文書は、コロナナ家に関連する書簡、会計文書が殆どであり、全てデータベース化が図られている。今回は宛名毎バンドルに収められている、コロナナ家歴代当主の書簡群(アマーティが活動していた可能性の高い1600~1655年)を調査対象として、差出人がシピオーネ・アマーティ及びアマーティ姓の書簡を渉猟した。

## 【結論・考察】

コロンナ文書館では、これまで経歴不詳とされてきたシピオーネ・アマーティの書簡 78 通、他のアマーティ家の人間による書簡 68 通を発見した。今回の発見した史料には、慶長遣欧使節について触れた書簡は含まれていなかったものの、アマーティが聖職者にありながら 40 年の長きに渡りコロンナ家に仕えていたことが判明、自ら執筆した政治論文について言及した書簡も幾つか認められた。とりわけ 1630 年代には、コロンナ家の書記官 (protonotario) としてパリアーノ (Paliano) の文書館設立や、そこに収蔵する文書・図書の選定などに携わり、コロンナ家の文化政策において重要な役割を担っていたことが明らかとなった。これらの発見は、アマーティの異文化理並びに政治思想を分析する上で重要な足がかりになるものと思われる。ヴァチカン文書館での調査は、現在 20 巻目まで完了している。史料の殆どが会計文書であるが、4 巻目には『国家の暗号』(*Cifra di Stato*) という政治論文が含まれていた。論文中に取り上げられている事件・事項は、16 世紀末から 17 世紀初頭にかけてのものが多く、アマーティと同時代の著作と推測される。今後この著作を、先に発見したアマーティ書簡と併せて分析の対象に据え、受容理論の立場から「読み手:コロンナ家」、「書き手:アマーティ」という知的需給関係の解明を試みていく。そしてこれらの考察を鑑みつつ、『日本簡略記』に見られるアマーティ、コロンナ家双方の異文化受容を考究していく所存である。